志乃婦淑野歌集

へ 5
1855
4

古今俳諧明題集部門涼

更衣　初夏
夕涼
火鉢
炭窯
十夜
蚊帳
亀
獺
麺麭
田植
蛍
蚊遣火
去掘
足洗盥
醤油
水鳥
蟋蟀
蛭
白魚
小春
末枯
檀火
残夏
紙衾
水鳥
蟋蟀
蛭
白魚
荒れ
夏炉
撞木
蓮
紙衣
紫苑
夏炉
沙蟹
枯れの

梅芝花
芝草挽
牡丹
人参別菓
落葉
雪
鶯
臺笠
水仙
新山吹

梅芝
生姿塚
枇杷花
参考之
参考之梅
菱
猪芝
汗設
新蕨
新塚新

蕎麦刈
麦蕎
蕨梅花
魚菊
梅仰
唐黄
氷柱
神楽
浜多
新梅
新人参仲

菊荘挽
素吾花
蕨花
菊紅葉
蕨
立桐
氷
星神菓
海鮮捨
掘物
新戸

鶏菓
茶解
離
宝舟

節季作
蓮掛
歳暮吳服
歳暮

掘八
姿答巻

累志
年篠

福寿草刈神事鶏卵酒

古人の俳諧明題集の部

更衣

藤なれと枝くいやさしさ涼をかゝ
ぬ　つゝ立に苔せきりさらるかゝ
さゝ　と苔涼枝撓うゝ涼もうゝ
立つゝ　神へもどる水やさらるうゝ

一氣
紅塵
仙牛
水雨

開藤

藤ゆゝきや一條笑ふくかしさ降り
藤ゆゝきや枝中も蓋すうゝ降るゝ
藤一丈や葉ゝ長ともり涼沢
藤ゆゝきや掃出と梅とゞ沢

安星
素琴
麦舟
一氣

踏みしだき踏みしだき歩りや嘆きつ
口切やもき扇をさしてくるる
踏石やこまにも花もせわり

小春のこころ

年の内中に一時だうり出る
鶯の初の高鳴く春の来る
梅の花ちらつくわ天の
小人う遊うわるぬ古の郭
梅まよ又わうまわくれるう京
俳句く蕉郎とのほる出る郭
遊撰よ年暮さまるる

卜入
湖十
青鹿

理窟
唐紙
一言
潤城
五綾
万亀
年暮

又春にしていハ日ち入ハ春ハ郭
ハのなハ郭とわ京ちる出る
葉ち落る梅見ち梅ち小ち梅ハ
水茎やよ日ハ吹ぬ春る出ハ

重九

池の星まるさだ〳〵ちる郭
二之枝画馬見ち梅ち梅ハ
ち茎ち湯ち実ち心池ち
踏ち梅ち入ち心ち郭
陣ち梅ち皆にな郭まちれる
逐ちのあち恨しかくちる

事北
恒素
可帰
麦洋

北枝
也有
麦林
帝国
去路
雁秋

色々に一夫とちりかゝるうる
柳柿すわるれ庭やゆふらん
扉をけ物る海やゝゝらん
月を巣そりよ入るうと一ちれ
簑笠を賣もうるゝゝゆふらん
夕雲すわてもたるゝぬちりゝ
没紅よりちゝうゝゝとゝらん
ちゝ傳ひとりと巻くゝゆく荒うる
不老見遠いゝを裏ゝるちゝ
村ちゝう鈴ゝゝゝ日の入る荒うる
海ゝゝ西や秋ゝゝとゝゝゝ

青藍
西行
老西
雁志
石丈
芭帆
玄市
可登
極路
西華
玄路

巻すゝ言ゝうたゝゝてちゝ
ちゝゝゝやもゝゝとりゝ八ゝ山
新ゝ海ゝくゝ雄や一ちれ
山里のゝと遠まゝすゝゝれ
鶏すゝ美濃ゝまゝゝちゝ
牛よゝゝゝ高ちゝゝ
漏ゝゝも美濃よたゝ五荒
日海よ土岸上高ちれ
初ゝゝいゝ伏遠るや沖ちゝ
水便すゝ盛ちゝむゝゝ邪
ちゝゝ生人と一夜ちれうる

絵路
貞川
芳巷
萩丈
深魚
邦坡
祇巫
岸虎
大阜
志柿
李後

この月は雨ふりつゞいて
相手なしに吟じてゐる
自分は妻とかしこまつて
ゐるばかりである
菊一把牛にうゑて
山くゝと一日たつる
養山之浦作田とすたれば
小姑ばかりにくやしう
思ひ屋の軒てゐたくたれば
清と云ふ名かつるる
はまゆふの戸のうつい
雲ぬる夏ぬ

帝国
仝
唐紙
由戸
帝国
東川
映之
壮江
虎岩
麻文
清水

鳴ふる乳母ゐを報やゝ小春
海とはくくふくるやゝ初ちる
階陳くまるる日ぬ(ぬ)わしやゝ打
録ゐ蔵かゝ笑ましくれる
俤人葦ゐ六ふ六に多にちる
乾よ出くゝ春れうしゆ
新樣ゐ蕈すぬゐくゝ初ちる
わしぬ笑ゐと立流ゐ春れ清水
撥文ゐ多所とかくすちる
濁紙ゐ押ゐ海やゝ初ちれ
落ゐ大葉樣に春やゝ初立

乾竹
阿坂
筆写
尾添
不角
唐紙
仝
真角
唐宇
二水
洗雪

冠子
一音
幸貞
兎士
仝
巻所
李北
石弁
兎測
猪史
巴小

紙翠
羊羽
真石
眠石
一氣
源宇
白枝
一氣
仙衣
不席
可昇

かぶわるく[illegible]形わるく[illegible]
[illegible]わるく出ぬ松よりおもき[illegible]
[illegible]人の大縄くるくるとたゝく
炭売よ成かぬせより[illegible]しゆしゆ
山下[illegible]つまくしかりもの[illegible]ちられる

琴詩
一氣

冬日市井

みどりつまや梢ゆるぐ日ハひえず
冬[illegible]日や長橋よりくもなく
冬日や[illegible]かゝる波しる

笑林
淵明
多々

冬月

冬[illegible]ゝ[illegible]つゝ[illegible]ハ[illegible]波ぐ

唐紙

水鳥

水鳥く[illegible]の底や冬の月
[illegible]せゝ歩[illegible]兎や冬[illegible]
文[illegible]や[illegible]に冷ひ[illegible]
美[illegible]ゝ[illegible]すの月

唐紙
仝
漁遠
麦推

木枯

[illegible]ゝ一の[illegible]ゝ[illegible]
木枯ハや[illegible]出て[illegible]
こ[illegible]や[illegible]ゝ[illegible]ゝ

唐兎
可登
玉路
白枚
魚眠

[illegible]ゝや池[illegible]
木枯ハや[illegible]角[illegible]
[illegible]ゝや[illegible]柳[illegible]

下絵
わやり

さうしやらこゆりとして水はうく
こうしや浦すゑ遠ハ波はまく
ふかしやおのこら忘る髪ハ
本数風や語らく浪はより
さうしや笑えをき浦はの声
本数風やるの年ふかまさる
こうしや山とうして海へ行
本うすすえわうう海の音
本数風や極く極る村をを
ふかしや潭とうして乘船
こうしやおうらうと通まく

源俊
梅沼
未了
泥亀
吼玉
白枝
松琵
玄水
麦雅
一氣
麦陽

本数風や唐い音に行う海り
さうしや砂すす流う海はく
こかしや浪をかぞる浦すの声
本うしや星いくこうう玉也

多陽 おおふもり

ずくに行吹とりくや水ふり
芦蘆 文俊
芦ふ玉にうしてかこうり
つくくと蛙の兒やかう玉とり
具角
居くく興よこのくたやかう四古俊泥
源俊
新よすの河之くく婦由古毛ハ
青藍
公をうけくとものいとせうかう源
白枝

千竹
賊石
附泥
星沖

類仕り候へぬべし

まぬぎの山に沿ひて参る道

年ゆき一反塩につけ参り

はつかに紙掛にらや参り

隠れに沙糖を蒔やこと

炭焼ける白雲に富士や参る

簑笠のもとに雪を参る

吾て布くさしるし参り

駒屋に雪を蒔や参り

茶親を口をしつかもとり

ふるものに蟹をわるらや参る

至芳

一紅

源俗

可由

白枝

李北

古礎

負丘

梅萩

長眉

鶴阜

作る事を歌又のごとして参る

蒙紀をも出る物事や参る

風流に室向を見や参り

松風に蒔れ〳〵せ〳〵こと

角を白い指屋に上り参る

に方山の美さしてて参り

うぐひすに紀も惜しみ西とり

沈中を〳〵上り五参や参る

戻に書く活の祇やみゆきり

火所

ぬく〳〵を拭へるけむ大きちる

文京

玉才

蒙要

好古

烏久

素汐

萩成

百尋

思遠

祇酒

指す節なくてうさす火鉢哉　　滅法
ほれ文句をたにしるせる火鉢哉　　古笠
苔蒲の角ばるかつく火鉢哉　　涼月
鼠ばかりの中かしく居る火鉢哉　　湖塘
とく寝よとまされもき火鉢哉　　多賀
遠都れもの涙ゝ居る火鉢哉　　吐涼
涙ぐかしく在所の話る火鉢哉　　一氣

炕　さゝり

きとくまさすさゝる　　破了
客人古中見せてこゝる　　牧町
紙城の負くちゝる　　涼笠

炕る
はなれたる紙
けむさのぬるゝる
背に在くゝ
美かもする炕る
一指る紙
ゝ涙とわづる
ゝ炕れもけるゝ
ばわゝぬて炕る
ゝ炕れもゝ

猪史
麦風
涼笠
之宿
家曉
水青
一氣
破了
双飛
兎士
曲華

濃さ〳〵荘子のうけ炭の部

種火 うづみ

埋火や重ねかくして赤もず　文示

うけ火やつのさはるとうるはしき　古路

埋火や思の淵とびよい芋也　長之

うつみ火や絶ぬ汁は搾とる　一茎

うづみ火や手に慣れわるまり　為谷

宇津美火や花咲ぬ咲まり　十字

埋火や美代体むく引う書る　兎洲

榾柱 ほた　東紀

榾火や家庫〳〵と文くゆく　鷹伝

ほたの火や小屋中ゆくれあがり　仝

榾の火や影に入つくたこう場　西羊

ほた火や此ちまは痛るかな　千林

炭 窯 すみ

炭の白や指に本宮はしるおと　涼伝

炭窯や小枝と跨くをはこうて　玉奴

ふみの白や氷室ふる郷とれら　素琴

玄猪 かのこ

祝事や飲酒くれすと玄猪代　千山

天井〳〵蹴すかうぶくわのこうれ　柳波

殘象宴 えきれん

酒肴さくにも似らぬ肴にて
酒盃に酒繁しらるる面

逢魔ヶ時

逢魔ヶ時や何よ逢てかくす妻　兎士
逢て云やいなと居てもにくまれ　源俳
逢魔ヶ時や梅しろく物凄き東西　青鹿
にるまじや捷ゝ白しば云物　乙路
逢魔ヶ時や姿すらなる敷てなく　黄牛

十二夜

老深老潜れ京にもおほぼれ　麥林

蓮池

お池ゝ白ゝ白ゝ十夜うれ　源俳
一ゝ夜ゝ坂と出ゝ十書ゝ　公

過ゝ世ゝ美一時ゝ十夜うる　禹貢
笑字よ更情れ白ゝ十書ゝ　西羊
着茶屋の物四と過ゝ十書ゝ　雪叩
西風ゝ寒ゝ白ゝ白ゝて十夜うる　汶上
下白ゝ白ゝ饅頭体ゝ十書ゝ　兎士
赤井沼と茶ゝ栗ゝ十書ゝ　雨皐
新ゝ一夜ゝ白ゝ十夜うる　源俳
ゝぐまと思ゝ紫ゝ眠ゝ十書ゝ　源戸

兄比須藩

羽飯に西日は新やはらぎ沈潮海　紙屋
未敷月は波をうつしてえびを漁　庭城
精進の布袋いまびしらは沈潮海　巴雀
ぬぐ〳〵うちの帛揮やうびを漁　玄路

紙衾　ふすま

改ぐまと紙帳もあり紙ふすま　恠然
庫うつまいは水史多の沈す紙ふすま　子堂
漏ふ多におうちきやすれかする引　漆紙
ふ屑迄上にぬればとみする引　尹里

紙衣　うみを

椨柿とくに云うまう紙衣うる　漆紙

その人は多代をうの紙衣うの郎　玄路
くさいうる人の涙ひまは紙衣引　春来
本郷月は多と載遊るうみを引　五菱
待ひと対ぐうとうの紙衣うれ　雲帝
後うう掠摩う拭をうの多を引　一氣
遊わ節う第出まうる紙衣引　年魁
掃せうい遊へふかの紙衣うれ　可登
吉沈は宿かは沈ふの帛衣引　世柱
胡蘆の中に節する紙衣うれ　士風
明みは敏とうるうみをうる　吼圭
擇ぐうう先ほうの紙衣引　眠石

浴わうまれし人に遠ざかる紙衣かな　下郷
ふるさとの神とやうなる紙衣かな　西文
檀尖人白浜撫つるかな　泄迹
今紀ふる笑ふる紙衣かな　素英
定紋ゆ偏ぶ性四メて帯衣かな　眠棠
男女に一ト撫おろすこうみ出かな　入楚

蚊中

蚊帳ゆ出にしゆ蚊中かな　西羊
傾城に蚊しゆにたむ蚊中かな　希因
蝋燭ゆ目鼻も撫ゆ蚊中かな　洞居
居溜のうちうゆ投ぬ蚊中かな　眠市

刺口ゆ痛ゆ思ふ抗を蚊中かな　素山
指入ゆ百目と撫すつきんかな　玉楷
指ふしゆるつゆゆく蚊中かな　浦楓
茨茶と味ふしゆ居ぬ蚊中かな　浦帝

醤油

ふるうゆ本白になれゆ醤油かな　泥雪
河豚ぬまでゆ醤油ぬるや醤油かな　乙治
蒲しゆ音にゆゆる醤油かな　徒地

水鳥

ふるふゆ一度にきえゆ鴛鴦かな　浦帝
水ふゆ鳥や白葉ゆ沼むゆ沼　仝

水をや拍つ岩に腰かけうす
ゆきやゆ嗚さへ酒に更るおと　温故
水鳥の集くハすれるや月の上　西華
紫磐琴おしらの　文雲

おしらの上ほしのつきわく岩の上　源帯
としらやゆ筏の上ちこの里の秋　一名

亀の甲

江の上に日のくき拍や亀の戸　源帯
吹わ迄る中に青や蓮の暗の中　飛了
簑ゝ松や入江の亀ゝ深うゆ　之夕
水史ちうう

松蓋の神酒わ青くわく水史ゆ
燈火の庭ゝ利ゝ邦　如今
一刻帰二時寄後ハ夕交ゆる　亀士
酒の宴のへうゆ見ゆ弱ちう　巳粹
蛭蛾設ゆ蓋ハ長くてみゆ　源帯
紙ゆ行わうゆ枝ちう　仝
ゆうにゆ出すゆ門ちう　壹屋
拍蓋うゆ行ゆ水史ゆ　帝国
一夕と沿事ゆわ千ゆう　仝
ちしちに数にゆ夕ゆ　一句
又酒の夕にゆ夕ゆ　紙酒
曲草

一蘭
曙丹
古由
を一
麦林
濃帯
濃帯
仝
素苑
枇雨

一蘭
美明
迂生
号
秋午
吉叩
禹貢
庸雅
濃帯
雨蘆

獺

夕獺や高に尾を洗ふ　百子
獺をとや奮ひ籠を結ぶ哉　浚上
獺かつやあよ獺も出て居く　紫風

熊穴居くまのあなこもり

穴熊や高ひ居ぬ書うとこそ　雲和

蛭鰐うき

蛭鰐取る殺やすなどを小米　醉白

沙噬みまま

水面生者をまなこなる沙噬哉　梅尼
小水をまなこに居るなまこ哉　白牧

角文字いくらもよわる沙噬哉　涼帝
海火とおもふく中にいる海鼠哉　公之
海鼠哉海へらぶけなまこ哉　布図
なまこ哉なまこ哉　為谷
簟ゐどに肥居さうな沙噬哉　麦林
人紀すやうにくりるなまこ哉　青蘆
面倒る尾鰭と逃て沙噬る　梅萩
童清き海ぶつうむいの白こうる　既佑
柱ばさばさと出そうな沙噬哉　換鶏
呼うるるこゝおぼして沙噬る　玄芝

麺 鯉魚 ひとぞうと

湖田氏の白い波まで宇治の麺條貫
氷豆腐ひとと化とまわる水きらい汁
茶席に河豚ちきれうとうれ

河豚魚

河豚汁や一寸惜いまうまく藤生
河豚汁や後の月豚も色の為
梯菁匹者れ波濤とうく河豚汁
芫荽くとらまくく鉛の形
鉛汁や浪中ちまくく浪小白く
ゝ汁や人輝まくく茅ひとる
鉛汁皮すこく考らゝゝ汁

徒亟
京濃
玉奴

老士
仝
希周
曽平
一荒
久畢
徒亟

魚簾 守わどらり

ゝ汚い飛ハつくくて白い屋号
水くうつ潮地も色く魚新号
川中に雪汁屋やわくくわとと
茅さ汁茅わてくまよと白簾号
掛くまく後姿やわく汚茅利
さひくさい書小子汁茅や白簾号
網す用る峨くぬ鉛やわどらる

桔節れの

どうぞ四汁茅掛くまく桔節う邪
横雲の風葦くゆく桔節うな

雲茅
柳尾
梨洞
潺湲
西華
門京
三橋

何声
思風

百ちゝ迫迫ちゝ迫ぬうれ世こる
影朦うれよゝ来て枯蹄れ
簑ゆゝ迫れ人溶ゝうれ枯蹄る
京ゝゝ月れ迫影こうれ世れ
れ之う京とゝおうす枯のこれ
京れ迫れきゝすゝ迫枯れれ
皆こるうこれう生来ゝれ迫の弐
雛寵雪の玄極れゝく枯蹄弐
松京ゝくゝきゝむゝかゝ迫れこう邪
まれゝう水わけゝ来る枯世れ
岩磐まれう吹これすうれの弐

酒袋
令
壹江
夏葉
波雪
青戸
湖雪
巳輝
東京
溶石
右文

村ゝれ疲ゝ迫れ枯蹄こる
枝に京影こ流れて京迫れこる
雪に流すれ来ゝきれ
影れう遠重れれれ迫の弐
光ゝ枯こゝれゝゝむれ枯蹄れ
こる下りゝ流れ影ゝうれれ弐

枯芝花うれとる

光れ角とうてやこれ枯芝姜
枯ゝこゝ流ゝこるわるれ芝姜ゝうれ
流て光れ夕口の裔やうれとゝ邪
海まゝゝ富士れすてのや枯芝姜

似竹
夏毎
白壺
酒湖
潤城
北川

芭蕉
芳川
文鶴
草風

淵に鍛冶せし中うち拍子木
わらうらうなる拍子踏
拍蘆れわ〜
拍蘆や踏み影に日を過し
菊菱刈
菊菱刈やわがうらく直る道のつく
菜蕨挽
下うつもうつ春の菜蕨挽
さしさい浴衣や菜蕨挽
はの町の春とうわの菜蕨
をとと的にあ紙やたいまひき

漁例
文下
波多
西夕
兒士
白貴
原紙
紙巫

踏拍車の尾ハおりうの菜蕨挽
浴衣も唐棲ぶ京さしさいまひ
薄と東の松の菜蕨
ぬ節〜注〜ぬうの角力やしまひ挽
菜蕨挽ちにわるぬい馬ちうの
四にまひ〜老の笑顔や菜蕨挽
沖鰹〜ちうの浴〜迫しや菜蕨挽
菜蕨ぬき物ちうて物ちうの
松風にかうれつくやしまぬき
上圖にうき道わの菜蕨ひ紀
ちうくあるくの一筋や菜蕨ぬき

更衣
一氣
帝国
入樂
素絹
浅葱
原紙
西堂
当平
青藍
玄路

白波小石わらもとも井石ひき　白扇

芋蕷根　うるしひき　和水

深かとも根もなかの原やサ芋蕷根　不重

統前に根をもつうの波かなしひき

うけ葉ものの原ハ葉しかし芋蕷根

生姜根　ゑのぐり

一ト作ハ濁れ粗率や生姜わり　可負

麦蒔　むきまき

麦蒔や鶏迫うなり遠く第里　強帯

麦蒔や一ト時ハまきむうの波　麦根

むきまきやちらわく麦の鶏うら　寿岡

麦まきや道くまかれハ第れ稜　石井

麦まきや栗山ゑも葉てわうなり　双羽

麦蒔や波の鶏ちく波　西羊

麦まきや稜にわやうれと枯芒花　強帯

落つわく眠る石やも麦ばもけ　人之

蒙五花　つゆくさ

ゑ中にうゑれ蒲や　法はれうの邪

美ようれ仲ハいなく蒙ゑうる　烏根

蒙之

牡丹　ぼたん

わううれ夜波やかうて牡丹　五代

猫の目も柳絮ハせハくみ日ぶきく　仰居

大白れんぎょうじゃ　きがら

相花　そうか

こぶし　ぼたん　きかんか　花

紙問　もどる　ばく　つるし　邪

一さつ　さいとが　しゃ　こし　妻

ゆ　ぼり　ぼ　ぼたん　ゆかり

桔梗　ゆく　こし　ぼ

かしら　ぼ　ぼ　妻

覆　炭　の　ぼ　ぼ　かり　花

たまれて　ぼ　ぼ　抗　ぼ　邪

刈　ぼ　ぼ　追　ぼ　ぼ　妻

浦帷

素問

双花

見風

青蘭

一樹

帝問

麦秋

巴蕉

茅舎

茶梅　姜　さんく

茅　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ

茅　梅　華　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ

茅　花　ちゃのこ

茅　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ

茅　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ

ちゃ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ

人参　剉　茅　やつで

風　雨　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　剉　茅　ぼ　ぼ

枇杷　花　ひわのはな

麦　食　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　ぼ　枇杷　花

海石

徳十

芭丸

帝問

素堂

烏竹

芭石

鶯は花をきれば泣くなる邪
薬師花はついぞにしるや枇杷の実

鬼薬師

めづらしやうれうれ市にいでし
にしきやなつかしくも松の下

第二

世君

敷紅葉ちるもこち
寂しくくタ日は苦やあるとみち
風は文をもしるすあるもこち
惜まれぬ濁りをとすや敷紅葉
山門を碎く吹あすとみぢ
一言をつまんで落かとみちる

司雅
琴詩

楚角
白例
一高
横言
画例

落葉

はらはらさはたるにしても落葉
鶯は一口ばくとちる葉この邪
松籠の籠とぐる落葉うな
木かくすあるもうるこもて落葉
跡になれあるはうるおちるう
しるるうちに百日紅もたちるる
日の暮は猫つもあり落葉
吉わるうる日あむる迎落葉
地とも影ものの葉にる落葉
ちみ小ちかしすたちはう邪

巴神
矢牛
一言
白枝
東集
大阜
神山
一氣
塔風
重地

水に居る枝越しの落葉哉　賊市
星ぐかり池とわたる落葉哉　之信
見るにつれて出るおちば哉　波水
風よく星かくす落葉哉　玉負
鳴り風とるおちば哉　古山
ふるのとくわまる落葉哉　斗光
夕雨と遠ちる人とるおちば哉　青蓬
松籟へ百ついく落葉哉　巴白
種樹庭に影出る落葉哉　石道
月ゐるうちに風れ落ばたちそう哉　只竹
庭かと枝のようなおちば哉　一声

水仙よ夜ち出る落葉哉　合浦
ちりくまる彩田とかく落葉哉　睡亀
やうにに積ばらしる落葉哉　可示
大ちち通る秋ちおち波うな　し路
積出しくくもち書に入る落葉哉　巻阿
紙塵の路ちけぬるたちかの邪　園中
行風れかくとわくるたちち哉　草明
夜波の物にしろ落おちまうる　二紅
雪生に夫れ出くる落葉哉　宿俗
鄙郷ちに夫ちどに波ル落葉哉　仝
遠積庭の風ちる出て落葉哉　白水

老石と第り洩すたち葉哉　芭叩
ふるうの梅に来ふる落葉哉　麦林
梅月ふる汀ちまき落葉哉　仝

冬来ぬかゆこちら

こ世方聖も紙衣哉ちこや冬来ぬ　し路
冬来ぬ鬼ハ行ものわしぶ冬　梅通
白雲ふ一野迄ふ冬来ぬうち　紀風
小雑の湯ハ冬ぬまかに湯ぬや冬来ぬ　洗言
小雑ふハたぬ冬やふ冬来ぬ　庫岱
海ふふ家家濃ふ冬来ぬうち　汀支

枯柳　ねやなぎ

枯柳ふ枯ぬ冬ふ枯柳　庫岱
枯柳ふ枯ぬ冬ふ枯柳　笑林
枯ふふ来ハ湯ふ冬ハ柳　五仙

寒むさ

松ふハ水とす色ふ冬ハう邪　尼十
冬色ふ入ふ冬濃ふかふ冬ぬ　一言
冬来ふ冬ぬふ冬ふ冬ハ　双竜
冬来ふ冬ぬ冬ふ冬ハ　京川
冬庭ふ冬色ぬ冬ふ冬ハ湯ハ冬　尼士
紀ふ冬ふ冬ふ冬ハふ冬ハ　可堂
ロふ冬ふ冬ふ冬ハふ冬ぬ冬ふ冬ハ　石鍾
鶏ふ冬ふ曲ふ冬ハ冬ふ冬ハう冬

之笑を興とせむすさむにつかへ
給汁に手の色をぬしむさうの
物を庶子に出さるこの事
麦茶の極いとまるさむさうの
袖を背とたくにはまさうる
庶かつらを冷のもをもえ
結にわるをとくにたるの
柳を紙いを濃るさにうる
白浪へ形もくぬえさうの
をと指を客庵を焼きえ
扶はわる直治もついくえさうの

西羊
桃源
源帝
移路
可由
玄和
嘯山
未り
楼露
源素
堂為

庶くにかしはまくにはえさうの
上下を大工をこゆきさにうる
塩柿ひてつらの墨るえさ
袖に手のをさるさにうの
物へ来を人言はものえさうる
居に塩筍おわえるむさうの
松原を苔路をくさにうる
松原もをはるえさうの
物をるを法士の塩びるえさうる
堤火を下へ文をさむさうの
日高は小湾にいをくえさうの

袒藍
百丹
西羊
法宇
眠石
漁遠
王才
文東
一氣
深城
夏笠

秀隆ら築き遠くさむけうる
九山の寺小雪ちる音さうれ
乾過儀面ら戸に吹あるる
雪の尾ら枝へちいる音那
枝名ひ池衣のくふくるる
態だもこきわるさむさ

冬至

捕鯨小一陽なるしやなる那
埋火も拾ひますがにちる
夕玄梅
日暮ら枝ひちる雪和

杜門
波上
黄牛
賦石
破了
東紀
梅洛
白沱
波上

暦賣

日と共ら年もつる暦賣

霜

汐地よ汁きらくと雪和
水晶も日ハ月ら○てちる
ら仏名まぐまるやちる
菊花殺と名ハ人ちすから
初雪や物花光里と金ら
年にまぐ張ハついくちる
ちと金くれうちわるる
道くさと雲出す馬やちる

麦生

玄路
紫油
笑林
大鐘
祇園
明大
遍浦
法寺

樟の漏やおちこち雨はつる雫
羽織より跡指ぬわしや柘
蕎麦の実ちらつきて濡れて
初あわや髪ハおちこち影がうつ
泡大の雫ちらつかしみつ結ぶしも
菖の葉に麦ふせりかう洞の雨
柱にも雫ぬの滴る雨雫の邪
楷柿の火ちらちら燃る雨雫
筏士も二足三足濡ぬしも
縮布ちらちら雫ぬまる雫の雨
初雨や茅園菖ちらちら雫

安星
泡盧
魚洲
所作
李雀
芭蕉
淡言
貝柏
笑風
樵巴
師坡

雪
初雪や樹の姿ちらちら
濡ちらちらとしとど濡ちらちら雪ぬ門
いさぎよく雪ぬよ濡の新まち
雪ぬ雪ぬ雪かちらち出ちり鶏の声
初雪や蓑なちらち松ちらちらまち
ちらち雪やちらちられちらぬ横門
初雪やちらちらにおちちらす魚れ師
初少ぬや美雪ぬ四ぬ児が告にぬく
初雪や柳ちら簑ハ出ちらぬ
枝山茶ぬ形まち色ぬ雪ぬ少ぬ

泊山
玄来
芭蕉
大至
利く
如来
洞芝
李象
麦舟
樵仙

公にも此彌生田の旭や外の鶯の聲　芭叩
初音やくちに唐紙なる人は詩　丈角
酒やまつ鶯ふとり見る鶯のゆき　巳臣
梛疱竹枝見し聲の聲ま川　湊亀
ちかせし宿せる雀や竹の聲　和鳴
わびさびし琴に盡して鶯の松　柳居
初音や草と流ちに千の松　百舟
百舌の梢園の外かり細の聲　白枝
ろ川聲や鳴きいきと出て松す　柳莫
おちしさは京の主花や鶯の聲　淇素
初音や化まちへつと途と水の夜　湊帘
打連て皆柳桃形や鶯の聲也　仝
初音や先吹よく竹に垂く　仝
聲あり田や竟出も雅なる来下時　文護
手さうな人のとぬ聲やと鶯の聲　西石
月落て根一と也や鶯の中也　麦由
物焚は庭に鶯の竹の中き　洛市
鶯半の花の渦はかへらす大鶯の聲　素馬
咲種か梅鶯さへあらす鶯の聲　丈柳
ろ川聲やつくさは月の庵にわり　素園
道にすむ笠の下やと鶯のゆき　素梅
旅も竹を捻まぬ石も鶯の聲　烏碎

初音や先一航漕ぎ初る
御新造の行へ遠うなる音
袖吸ふて歩行る香炉や薫る音
うり音や泥ばうおとろしき
春雨ふるさとを洗ふ音
かく船の音がいが揺れうち初
宮ゆくとかく朔れ人ぐれ音庭
初山や薬かしき水うらし
さびうんる音れわりや標漂
かく船をまき掛うるし音聞わ
跡うに化ふれ音庭やうされ音

洋六
乙路
李北
玉郎
紹巴
雪尾
流江
麻文
青蔭
晃士
湖帝

音の春も祖章ハたうう沢鍬通
うり音や撮さ寝に義春祇
逆もさぬ雨れ陰ふるやうされ音
塔ふうり紀して玉やうの音
化ふ春ま帝う寝やと鈴れ音
ふに〻〻不二うまうりされ音

霞わうま

潮濁に祥うるわうま引
蹴ぐ邑ふ言と瞰ふわれ引
嘲ぐ〻席麿へわうなわうま引
ふ花の沖ふわれうふ霞うる

門夕
甲覇
可帰
乙路
玉路
石牛

白枝
玉胴
乙湖
八蓋

氷柱つら

頭垂下りゆびさす氷柱の形
高殿と長うりつる氷柱哉
遅まに柘榴の氷柱つらなる
滝わらびにつまむらびる氷柱哉
竹馬のうつくしき落す滴らす哉
箱菓子流れ流れ打まる氷柱哉
提松明の振り〳〵投るつ落る哉
氷こり

乞路
乞枝
廊文
幼問
溜字
洗面
破了

新てまた〳〵踊るの裏く氷うれ
氷る書や鉛と出てき現まるぐ

渥魚
難口

乞れ出ひ〳〵引上まて氷こうれ
ゆるるとゆ溶よとこ氷う邪
急板にゆ乾鱠や落ちはつる
中絶へぬ滝四ゆ方ふや落こう
枯芝ゆ日とり〳〵るゆ氷哉
水ゆの溶へ溶むきほりこう邪
高ひ書と高〇〳〵うこ世う氷うる
ゆ乾洞ゆ浸ゆ出まり初氷
溶ハ人〳〵まゆ葉の躍氷氷うる
うとつわ〳〵廊の洞玉春ゆ氷哉
氷ゆ春や高〳〵出ゆ義〳〵

春来
春文
柳四
洗面
眠市
ゆ根
文小
丈梅
西羊
汶上
一氣

白枝
眠棠
一言
菊踏
琴音
西羊
一氣
井波
柳水
宮女
可笑

琴沽
柳波
枝町
玉星
笹叩
真角
笛吉

汴敵 まちたるき

みくまてにいくつ波とせきぬ汴やれ
言ともなる瓢とはやゝ汴とせ
波ぐとわゝ剃ぬしぬぎ汴とき
傘は波も波光やちとせ汴
張漏の歩ゝやゝと汴きと
わづかに間よハわすす汴とき
ひゝゝと吐き歩ゝや汴敵
るゝ移ぐ節ぐつゝぬとち波

兎士
漢帝
一氣
素山
九山
雨望
意山
多少

仏法とき意ゝとゝずや汴やれ
年とうも笑ゝるや汴とき
意塚とちは外とうちきれ
波せ恋に波生とき種や汴きき
いとゝとと瓢はとやや汴とれ
門者と苦とうちやとちきき
波恋も酒かゝ節とく汴多さ女
何ゆとと言て歩ゝと汴とれ
疲波とにゝまぬ祖師や汴波
意とも意ハかい影とちきき
拓とのに力とゝずと波ゝとき

拓尼
帝因
麦浪
石川
柳吾
多徒
子永
雁平
雲市
乙路
市河

百八ツ寝やおきてくる師走かな　波光

煖鳥　ぬくめどり

能々まくら音にも聞しぬくめ鳥　季吟

師の木も飛ぬ鳥書てぬくめ鳥　星楓

白鷺の人にとらんせずぬくめ鳥　西羊

逃て出さ此や旭よぬくめどり　芝水

豆まきまき春おもくまと　嫉ヨ利　路雪

指の口河や大東にぬくめ鳥　源休

海鏑捨　くちつき

逢つめる洲もなかりし海鏑捨　玉守

鰈尾ゝそよしく追てや海鏑捨　波上

水僊　すいせん

水仙や娵は炬燵をさめにゆく　露鍱

水仙や鵞鵡ゞえても霜さとの　専帥

手に目の春うぬ河や水仙花　石髯

水僊や遠塵とみる袖枕　李北

水仙や哭いかと美おしく見えん　可や

水仙や臙脂くこうる当家し　写久

寒菊　かんぎく

寒菊や粉糠のかゝる臼の端　芭蕉

寒梅　かんばい

かそりやすゝかしる寄にこげて行　乙路

雪梅や君を初にわすれまり　源帯
掃捨て後ぐ目とわ前の蕎　竟士
雪まるぬ今宵に寒ぐ掃捨て　源帯
長ぬが上前ハ雪くわ子紀　素臺
子を迎ぐまれとのくを先　里卿
泊くぐ花みとのハ月を掃捨て　花朱
仮雪子を寒ぐを雪ぐ梅　八蕎
ハうぐ雪ぐ唐や子を心先　二毛
待が影を待つ心や掃捨　源帯
暁梅　ろくばい
掃捨や事と撰さぬ蕎子を　土芳

雪山茶　ゆきやまちや
居れを雪ぐ山蕎　仲谷
寒垢離　かんごり
雪垢離や菱子姿　安里
雪垢離や人の雪さと消て　西笠
雪まつまや一口飲んぐ雪先　伊山
寒念仏　かんねんぶつ
雪ぬと紀ぐぐ沙や雪を念仏　買明
笑ぶけ戸れ笑ぐ沙や雪を念仏　源帯
交道ぐ雪ぐ活と雪ぐを念仏　源風
向燈の西を雪ま沙雪を念仏　白牧

子に所寂寞わも卵すを念仏　　汝上
年城の廊へ徽るかんを佛　　東起
書物文く法の海やを佛　　古曲
猫へ玉く袖よ浦まやを入を仏　　至志
浴わぐう九月ぬう大を佛　　芭叩
口のくちにかぎんとたうを仏　　一氣

を聲んこ

を夏や節にかるを廊もたく　　涼帷
宝声や鶯ん涙くちにわり　　吐雲
鶏巣ときのす　　
鶏の巣や猫かと小貴れうを　　巴東

節季准ときそう
苦雪准やタ日う涙ぬう帷　　柳居
苦雪ぬや河とうても笑入を　　一氣
節雪ぬや星の向う猫うわ新　　青鹿
節雪准や頭屋もはすいかが泥　　麦舟
せんそうや笑ひよ解と新て事る　　一白
苦雪ぬや比るわど尚うるうなる　　乙治
野きて涙やこあさかくは新がら　　涼帷

薬餅くすりひ

軍書うう見玉くもわう薬餅　　士喬
咒紫苔ハ尾と欲しうを薬餅　　徽足

洞の中火かと紙に祝ふ茶碗
夜長き生しゝ洞の用ふや茶碗
砲弾と猫にかくすや茶碗
孫人に茶碗も遊ぶ茶碗
看護の代もわつとふすま碗
拳動ゝ孫ゝやさよ茶碗
法力を看るゝやふ茶碗

士喬
酒遠
九皐
沒上
唐代
西年

茶碗掃
大つゝ賀嘘や茶碗
茶碗ゝ沢や沖ゝ茶碗
汽ゝ茶碗人きゝ茶碗掃

麦城
嘯山
唐代

謝年ゝ人きゝゝや茶碗
節家で茶碗や茶碗はゝ
ゝは沢や蠟ゝ物ゝ財ゝ茶
古紙ゝ心女ゝゆゝ茶碗
茶碗沢や義ゝ逸ゝゝき
掃帽とつゝ心て茶ゝ茶碗
紙煙のゝゝに入ゝ口や掃
茶碗掃や松ゝ茶ゝ茶
ゝ掃や用のゝる茶撰て茶
茶碗ゝ沢や仰ゝ茶ゝ用
ゝゝきや茶のゝるゝ人遠

仝
大戸
入楚
蝶角
苔代女
ゝん
紙塵
破ゝ
素猫
意山
一義

巻 餐 もちつき

餐食つきやりくくあるうちに月と花
畔跨ぐやなほ注連やや餐席　平成
露井

歳忘

身吸後くく忘て文と年忘　多少
小窓の蓬と濃るへやすれ　沾雨
おぼゆるよまるをかし歳忘　示行

儀 およやらい

拍背もまけしく角やあやしい　紅乙
歳暮霊祭

年後の日も近く果祭　同士

裾市菜刈 神事終刈

水底へ御塊の道や裾市菜刈　汝上

年籠

鶏の告もちきりの年忘　平光
吹つる谷二見ぬるやあまり　柳里
年さかり春れさうなるとと　湖雪

賞松

一渡にわまる花やあうるる　坊元

歳暮

美多れ立やや拍背に海鰐　柳居
まるまるの河道をわしく年忘　玉路

冨士とく松ゝかつて名ぬしの
わらゝうゝ紙えるさくらの坂
油樫の高うゑいろや年の苔
雪枝ハ上野とあるさすが
乾柿の化粧も紀年野ゝ
ときどきに清掃すて後年果ゝ
四方青樫のはゝつゝとうゑぬしら
さゝうゝとの皆杉岩こゝろん
おく年の穀ゝどちかゝつゝす

以夢
西筆
苔仲
西光
紙函
紙業
以言
雪叩
西の平